

追悼 吉田尚利先生を偲んで

こうじょう ま まれしげ

高上馬 希重(北海道医療大学 薬学部)

※「薬用植物研究」39 巻 2 号(2017 年 2 号)pp49-50 より再掲

今回、著者の高上馬 希重 先生(北海道医療大学 薬学部)と薬用植物栽培研究会様のご好意で「薬用植物研究」に掲載された、元北海道大学薬学部 附属薬用植物園 助手、元北海道医療大学薬学部附属薬用植物園 職員 の吉田 尚利先生について書かれた記事を再掲することになりました。

本記事の再掲に当たり、ご協力いただきました薬用植物栽培研究会 会長 御影雅幸先生(金沢大学名誉教授)および事務局の皆様には、感謝申し上げます。

松田 彰 (15 期 同窓会長)

同窓会 HP:2023 年 10 月 12 日公開



追悼 吉田尚利先生を偲んで

北海道医療大学 薬学部

高上馬 希重

去る平成 29 年 2 月 14 日に吉田尚利先生（元北海道医療大学薬学部附属薬用植物園，元北海道大学薬学部附属薬用植物園）がご永眠なされました。昭和 11 年 4 月生まれ，80 年と 10 ヶ月のご生涯でした。昨年の秋頃までは，植物観察会などにも参加され，お元気にご活躍されておられるご様子でしたが，実はその頃にはすでに体調を崩されており，あっという間の出来事でした。不謹慎ではありますが，甘い物が好きだった吉田先生がバレンタインデーにお亡くなりになられたのは，いかにも吉田先生らしいお洒落さかなと思う次第です。

ここでふれる内容は，私が吉田先生と初めてお会いしてから以降の出来事で，先生のご活躍のごく一部であり，「もっと素晴らしいぞ」と思われる諸先輩方も多くいらっしゃると思いますが何卒ご容赦ください。

吉田先生は北海道の旭川のご出身で，昭和 31 年に北海道大学医学部薬学科（後に北海道大学薬学部）の職員として採用され，北海道大学薬学部薬用植物園の助手としてご定年までお勤めになられました。先生がご採用になられた当時の北海道大学薬学部の生薬学講座は，薬用植物栽培研究の日本の中心的存在であったと聞き及んでいます。吉田先生の多大なるご尽力により，ダイオウ，ゲンチアナなどの栽培方法が日本で確立され，北海道内での生産普及に貢献されました。その他にも数多くの薬用植物の調査，研究に精力的にとりくまれました。北海道大学をご定年退官後は，北海道医療大学薬用植物園の職員として平成 23 年までお勤めになられました。当薬用植物園を一度でもご覧になられた方の多くは，その広さとよく整備された管理をお褒め下さいますが，この状態にまで至ったのは，まさに吉田先生のご尽力のたまものです。

吉田先生が生薬，薬用植物の研究発展に多大なる貢献をされたのは周知の通りで，その功績を称えられ平成 13 年には日本生薬学会から功労賞「題目：北方系薬用植物の栽培・育種および生薬の調整法に関する研究」を受賞されておられます。

私と先生との出会いは 20 数年前の平成 6 年ごろであったかと思います。当時の私は本州にある大学の大学院生で研究テーマとして「ホッカイトウキの基原植物の研究」を与えられていました。当時の日本薬局方において生薬トウキの基原植物としてホッカイトウキが初めて明記され，北海道がホッカイトウキの有力な栽培生産地となっていました。ホッカイトウキの由来には諸説あり北海道でのトウキ属植物の調査が必要であったため厚生労働省による科学研究班が組織され，私も小間使いとして北海道に行かせていただきました。その時に実地調査の中心的な立場としてご活躍されたのが北大の吉田先生でした。先生との函館空港での初対面はいかにも現場の職人，それでいて帽子とベストをお洒落に着こなしている，といったあの風貌です。後にアルバムを拝見した際に 30 代ですでにこのスタイルだったようです。北海道にはホッカイトウキと形態の似たトウキ属植物が自生していることを吉田先生はすでに気づいておられ，南は函館から北は稚内，網走・斜里まで，数年にわたって調査を行わせていただきました。北海道一周の調査中，「おまえさんは植物のこと知らねえなあ」と何度も言われたのを覚えています。このフレーズはその後 20 年間，私が大学で教鞭を執るようになってからも時折お小言として頂戴することとなります。

先にもふれたように，吉田先生は北海道医療大学の薬用植物園およびその隣接する自然林である北方系生態観察園の整備に勢力を傾けられました。平成 21 年には薬用植物園の附属施設として北方系伝統薬物研究





センターが設立されました。この施設の目的の一つは生薬標本庫の設置で、吉田先生はご退職されるまでの約3年をかけて千点以上の生薬標本を整備されました。この多くが薬用植物園で植栽・収穫されたもの、あるいはフィールドワークで収集されたものです。中でも驚かされたのはダイオウ根茎の全形標本です。これは昭和60年にご自身で栽培し調整した後に長らくご自宅で保管されておられたもので、吉田先生の生薬・薬用植物にかける情熱をあらためて痛感させられました。これらの生薬標本は大学のイベント時等には一般公開されているので機会があればぜひご覧頂きたい。

吉田先生は常日頃から、薬用植物の国内栽培の必要性を唱えられておられました。北海道では昭和40年代から50年代初旬頃まで、シャクヤク、トウキ、センキュウ、ダイオウ、ヨモギ、ハッカなど数多くの薬用植物の農業生産が盛んであったそうです。しかしながら、日本の高度成長とともに生産主体はコストの安い中国などの国外生産にシフトし、国内生産は激減してしまいました。高品質な生薬の安定供給には国内での生産の復活が必要です。特に北海道の利点として、冷涼な気候、大規模な農地、高度な機械化などがあり、農業生産に適した薬用植物が数多くあります。

中でもご退職前の吉田先生はムラサキに対して特別な思いをお持ちでした。ムラサキの根は生薬シコンの原料となりますが、栽培化が非常に難しいと言われてきた植物です。吉田先生は「ムラサキの栽培化は必ずできる」と数年をかけて試行錯誤されました。まず種子が思うように発芽しないということから始まり、プラグ苗の調整、肥培管理、夏場の多湿・病害対策、収穫適期の見極め、収穫方法・収穫後の調整、種子の保存、などなど各問題を着実に克服され見事な生薬シコンが収穫されるようになりました。現在では薬用植物園で収穫されたものを、学生が実習で作成する軟膏「紫雲膏」の材料の一部として利用しています。また市民講座で行う染め物教室の材料としても利用しています。近年、この技術は大学が立地する当別町の生産農家が取り組み始めた薬用植物生産にも取り入れられ、地域振興にも寄与しています。

ここ数年、日本国内の薬用植物の栽培、生産を取り巻く状況が大きく変化しようとしています。国、自治体、製薬企業などがこの問題の解決に取り組み始めようとする気運が盛り上がりつつあることは多くの方々がお感じになられていることと思います。吉田先生が残された知見、育てていただいた人材、そのお人柄にふれた方々、これらの「タネ」が芽を出してこれからの薬用植物・生薬の発展に寄与するものと強く思う次第です。

終わりにあたり、吉田先生に大きな感謝を申し上げるとともに、ご冥福を心よりお祈りいたします。



北海道のトウキ属植物調査にて



吉田尚利先生（第60回日本生薬学会
年会・北海道医療大学にて）



北海道医療大学・北方系伝統薬物研究
センター 生薬標本庫にて

